

補説二 政局への震撼と救済・復興内閣の成立

関東大地震の八日前、一九二三年八月二四日に病氣療養中の首相加藤友三郎が逝去し、臨時首相として外相内田康哉が任命された。① 同時に摂政宮裕仁親王、のちの昭和天皇は、近代日本の複雑な政治制度のなかで、奏薦権を有する元老に後継首相の人選を下問する。同月二九日加藤首相の葬儀が行われ、とりわけ西園寺公望の推挙によって、海軍大将山本権兵衛に組閣の命が下された。さきには山県有朋、のちには西園寺（西公）の秘書を務めた松本剛吉の『政治日誌』を参照する。

加藤首相の逝去から山本内閣の成立へ（松本剛吉政治日誌）

八月二十四日

午前十二時四十分加藤首相薨去す。

此日より築地浅岡を借切り、各種の情報を徴し、西公及び平公に電報を以て数回情報を發す。

午後二時新橋を發し、小田原に泊す。

① 『官報 号外』大正十二年八月二五日。

八月二十五日

午前四時半小田原を發し、長尾峠を越え御殿場に西公を訪ひ、加藤首相薨去前後の情報を為し、去る二十日平田伯を訪ひし際の伯の談話を語りたるに、挙国一致様のものをやらせようと云うのかと念を推さる。

〔中略〕

此日摂政宮殿下には軽井沢より御帰京、宮中に於て内田外務大臣に臨時兼摂首相の親任式を行はせられ、四時葉山へ行啓遊ばされたり。

八月二十八日

首相官邸に於て加藤首相の告別式を行はる。

午前十時摂政宮殿下御還啓遊ばさる。平田伯は午前七時松方公を訪問し、一旦逗子に引き返し、殿下に扈從して帰京せららる。〔中略〕

午後一時平田伯より電話あり、直に伯を訪ふ。伯は山本伯御召の経緯を話され、挙国一致の内閣ならん、其の経路は今御話することは憚るゆえ之は勅弁願ふと言はる。

この日午後三時山本権兵衛伯を宮中に召され、内閣組織の命降下せり。

予は午後六時の汽車にて小田原に到り、一泊す。

〔追記〕

二十七日徳川侍従長は御殿場に、入江東宮侍従長は鎌倉に各御使として西、松両公を召されたり。西公は二十七日午後参内に先立ち、松方公を鎌倉に訪ひ、同行参内を勧めたるが、松方公は病気の為め参内する能はず且つ万事を西公に一任するの意を以て西公の提議に同意せられたり。よつて西公は午後四

時参内して平田伯と会見し、前陳の如く山本伯奏薦に決し、殿下に奏上する所ありしが、直に御嘉納あらせられ、殿下には翌二十七御帰京遊ばされ、平田伯之に扈從して御帰京の上、午後三時山本権兵衛伯は御召により参内、内閣組織の大命を拝したり。

八月二十九日

午前五時小田原を發し、自動車にて西公を訪問す。公は山本伯御召の次第を話されたるも、詳細なる経路は他日に譲ることにして頗る緊張せられ、今回は自分の全責任を負ひ奉答せしこと故、八ヶ間敷なれば切腹する覚悟なりと語られ、田男、田中大将等の話出でしも、之を略す。①

内田康哉を首班とする暫定内閣は、八月二五日より全員辞表を用意し、後継内閣への引継ぎを開始するが、その間九月一日に関東大地震が勃発する。朝鮮総督府の政務總監をも歴任し、当時内相の地位にあった水野鍊太郎は、官邸における地震の衝撃とともに、臨時政府による緊急措置について貴重な証言を語る。

内務大臣水野鍊太郎の証言 その一

地震のあった時はあたかも、加藤友三郎氏死去して、内閣は首班を失ひ、内田外相、臨時首相の拝命はし

① 岡義武・林茂校訂『大正デモクラシー期の政治―松本剛吉政治日誌』岩波書店、一九五九年。二五一、二五三―二五四頁。

たが、閣員は全部辞表を捧呈して後継内閣に政務の引継をし様として、一切の仕事了はつてゐたのであった。自分は、省員に最後の別れを告ぐる為め、加藤秘書官に命じて官邸に晩餐会を催す種々の準備をさせてゐる真中であった。その瞬間にはそれ程とも思はなかつた。然るに段々警視庁からの報告で、諸方に火災が起つたといふ事を聞いたので、取り敢えず 天機を奉伺して 摂政殿下に大要の事を奏上し終つて直に臨時閣議に列した。其中ちに諸方面の報告が、集まつて来るにつけ、予想だにしなかつた大災害の様に見えたので、応急措置を講ずる事とし、微発令を出すと共に罹災者の救護と食糧の手配をする為め、臨時震災救護事務局を特設して、首相を總裁とし、政府の各部局総掛りで善処するの組織を立つるの議を纏めたが、何分にも、未だ経験のない事であるから、誰にもちつとも見当がつかなかつた。兎に角、何をするにも予算が必要であるから、差当り九百八十万円の臨時支出を予備金から出す事に決した。市米大蔵大臣も直に同意して呉れた。此閣議は、総理官邸の庭で開かれたが、伊東伯も着流しのまま見舞に來られ、有松氏も、日本銀行總裁井上君も見えた様に記憶している。最初参内したときには、林野局にも火が起つてゐたが、其時は、まだ諸方からの報告も、不揃いで、詳細の事も判らなかつたけれども、そうひどい事とも思はなかつた為め、格別御心配の事は無い様に奏上しておいた訳でありますけれども、其後報告が集まるに従つて、橋が落ちて江東方面とも連絡が断られたとか、米庫に火が付いたとか種々容易ならぬ事が判つて來たので、自分は再び参内して状況を奏上した。当時内務省も焼落ちたので、官舎で何かと始末をつけ、夕方から、赤池警視總監を随へて、災害状況視察に出掛けた。然るに神田辺からは自動車でどうする事も出来ないもので、車は乗り捨てて、上野辺迄巡視して、意外の惨状に驚いた事であつた。其後愈々深川の倉庫も焼け落ちたといふ報告があつたので、大阪府庁に、玄米を送る用意をする様に、海軍省の無線電話で、手配したりして、官舎で蠟燭を

点して書類の整理をしながら徹宵した。①

内田内閣は摂政宮へただちに震災の発生を上奏し、用意の周到を尽し罹災者の救助に努力すべき旨の御意を賜る。首相以下閣僚全員が二日の午後三時内務大臣官邸に参集して、暫定的な政権ながら緊急に協議し、応急政策に着手した。すなわち臨時震災救護事務局を設置して同局内に、総務部、食糧部、材料部、運輸交通部、飲料水部、通信連絡部、衛生材料部、警備部、消防部、会計経理部等の各部を設けた。また、非常徴発令を施行して、各地の食糧、燃料、薬品とを地方長官に管理させ、及び警察の手で管理し、罹災民に配布供給させた。② 応急措置に関する内相水野の回顧はなお続く。

内務大臣水野錬太郎の証言 その二

然るに、徴発令にしても、戒厳令一部施行にしても、枢密院の議を経ねばならぬ。依て書記官長にも来て貰って種々相談をかけたが、議長始め顧問官の所在も不明であり、また参集を乞ふにも、通知の仕様もなく迎へにやる手段もないので、途方に暮れた。さればとて、手続が出来ないからといふて、放任しておく訳にも行かぬので、総理以下議を凝らして、内閣の責任を以て御裁可を仰がうといふ事に決した。〔中略〕それ

① 東京市政調査会編『帝都復興秘録』宝文館、一九三〇年。二二一―二二二頁。

② 『官報 号外』大正十二年九月二日。online。

から早速法制局長官に起案を命じ、内田首相と共に、赤坂離宮に伺候したが、此時は、畏くも陛下には御庭の御茶屋に飯のテントを調らへて、其内に御いになった。事の由を奏上して、御裁可を得たが、事情実に止むを得ざりしが故に、民心の安定上内閣の責任を以て、枢密顧問の議を経ず緊急勅令の發布を見るに至った次第であります。当時一番気にかかって一同痛心致しました事は、日光に御駐^{ちゆうた}輦中の西陛下の御模様でありました。東京の様子を御知らせ申上げるにも、方法に困り果てましたが、御模様を承はるにも困りました。結局陸軍からも、内務省からも人を出しました。川村貞四郎君であったかどんな困難を排してでも行って来ますと申出た事を記憶している。

横浜の様子が、知事の命を承けて来た警視の報告に依って、較々明らかになったのも、二日の朝であった。段々諸方からの報告で、愈々大事の模様が判然として来た。然し乍ら辞表捧呈中の身であるから、何かと出来だけ始末をし様とは考えへたが、どれ迄責任を執ったらよいか、判らぬので、随分当惑し、山本伯爵に、早く後継内閣を組織して貰ふ様にしたいと、内田首相に迫って貰ったほどであった。併し責任のある限り、出来るだけ、仕事をやる様にと思つて、救護事務局官制の發布に伴ひ、内務大臣官邸に係官を招集し、総理大臣より一場の挨拶を為し自分も副総裁として之を補足し、各省共に献身的な協力を為す様に切望し、費用も取敢えず千万円臨時支出に決めたが、足りなければ、後日補充すべきに依り、必要なる事はドシドシ遣つて遺算なきを期する様に希望して応急の措置にとりかかった。

其うちに、親任式もあつて、山本首相、後藤内相、田中陸相、井上蔵相等も見えたので、真に引継を了しました。救護局の事は翌日内相官邸へ出て、後藤伯に御引継ぎしましたが、其時自分は災後の措置に関しては、朝野を問わず、充分しなければならぬから。自分は朝を退いた後といえども、御用あらば出来るだけ微力を

尽しませうと申したるに對し伯爵は、其時是非帝都の復興計画を立てつつ、単に旧時の帝都に戻すのみならず、この機会に是非震災の跡に鑑み平時の都市計画を是正して実行したいといふ決心を示されて、ドウだといはれましたから自分は、それは結構の御考であるが、金がいくらかかるか、よく後継内閣で調整になって、御考になったらよいと御答して御別れた事でありました。けだし伯爵は此時から帝都復興の事を深く考えておられたのである。①

組閣の大命を拝した山本権兵衛は、帝国海軍の確立者と知られ、東郷平八郎を連合艦隊司令長官に任命し、日露戦争を勝利に導いた。一九一三年松方正義の後をうけて首相に就任するが、海軍將校に係わる贈収賄、シームズ事件への責任により翌年総辞職する。こうした山本の再登場に世論は必ずしも好意的でなかった。「雌伏旬歳」と評する雑誌もある。「シームズ事件に癒すべからざる痛手を負ふた山本権兵衛伯が再び内閣を組織し様は誰が予測し様か。山本伯擁立運動は政変毎に企図せられ、しかも常にいつとはなしに消えて行くのが慣わしであった。加藤首相の突然の病歿と共に既に山本内閣説は政界消息間に微妙な空気を漂はせて居たのであるが、『また例の山本内閣か』とあまりに重きを置かれなかったのが実状であった。」②

とはいえ、組閣の本部として選ばれた築地の水交社には、沢山の報道陣が詰めかけ、新たな閣僚の顔触れに注

① 東京市政調査会編『帝都復興秘録』宝文館、一九三〇年。二二三―二三六頁。

② 講談社編『大正大震災大火災』大日本雄弁会・講談社、一九二三年。五五頁。

目した。海軍將校の社交機関たるこの建物には、貴賓室、食堂、宿泊施設も備わり、機関誌『水交社記事』もここで発行されていた。九月一日水交社における折衝の模様と地震の発生については、山本自身による無二の証言が遺される。

総理大臣山本権兵衛の筆談 その一

地震の数日前、因らずも内閣組織の大命を拝しました。誠に恐懼に堪えませぬので、平田内府、牧野宮相に、不肖年老いて、為すあるなく、如何にも無理と思ひますが、辱き内命を拝しましては、又奈何ともしがたき大命拝受当時の自分の氣持を御話して、退下致しました。〔中略〕

先ず相談を掛たのは加藤、高橋の両君であった。然るに加藤君の答は、如何にも御尤もだが、自らは進むで御請致し兼ねる。其代りに自分の党から然るべき有力の人を推薦するといふ事であった。しかし自分は素より加藤君を望んだ事であるし、既に大体義は、首肯された様に思ったから、其儘とした。高橋君からは、折角の御話ではあるが、今日の高橋は、従前の高橋では無い、従前の高橋なら直ぐにも、御請けするが、今は党に諮って見なければならぬ、しばらく猶子を乞ふとの旨であった。併し此方は後から望月君が使いに来て、折角だが貴意には応じ兼ねるといふ挨拶であった。次ぎに犬養君に相談したが、国民を相手とする大體義は賛成だ、是非政党は主義綱領より覚醒してやらねばならぬといふ見本を作りたいといふとであった。元來自分は、人に相談しない方の流儀であるから、面倒と見た人には一々自分で交渉して、自分の信ずる人大けに参加して貰ふ積りであったので、なかには不平の人もあったやうに聞いている。

そして水交社に平沼君に来て貰って、話しかけてみると、あの地震に出会した。まだ暑かったので、二階の隅に在る小さい室で、窓を明け放して、兩人対座していた。相当強く震動を感じた。不図天井を見ると、平沼君の頭上に、重そうなるランプが、大きく揺れてゐる、危いからよけたら可かろうと注意もしたが、其中ガタガタ物が落ちたり倒れたりするので、平沼君と共に注意し合つて外へ出た。平沼君は、熟考を約して一旦引取ることになった。早速、天機奉伺をしようと思つたが、スーツケースは二階の一室に置いてある。人に話せば、止めるに定つてゐるから、黙つて二度目の大揺のちよつと収まつた間を見て急いで取りに行つた。此時はもう廊下には、備品類が倒れかかつてゐて、中腰で辛うじて通る事が出来た。漸くにしてスーツケースを持って下りて来ることは出来たが、既にして深川方面に何か爆発する様な物音が、遠く野砲の音を聞く様に聞え出して来た。天機奉伺を済ませて帰つて来ると、人が津波が来るといふ。見る間に水交社の池に、流入する木材が十数本も打上げる様になり、水量も瞬く間に増嵩した。大変災の様に思はれて来たので、即刻組閣の事を了して、宸襟を安んじ奉らなければならぬと思つたが、当日は、モウどうする事も出来ない。仕方がないから、帰宅したが、自分の邸も、ヒドい有様で、勿論まだ、永田町へは行けず、明日の本陣とする場所が無いといふ始末であつた。すると財部（大将）が、自分の宅の方が、ここよりかまじだといつて呉れた。①

① 『帝都復興秘録』三一八頁。

水平社の建物は震動と火災によつて潰滅するが、山本は脱出して無事であつた。この日『万朝報』の記者、洪田紅塔は、多数の報道陣とともに築地に居合わせ、新内閣の成立を待機していた。彼の報告には組閣本部の情景とともに、山本権兵衛はじめ有力政治家への衝撃が如実に描かれる。

万朝報洪田記者の報告

此の大地震のとき、私は万朝報の記者として、東京各新聞通信記者約百四五十名とともに将に生まれんとしていた山本（権兵衛伯）内閣組織の本陣であつた築地の水交社に詰めて居た。

其の日水交社では山本伯の外に当時大審院長であつた平沼騏一郎氏（現司法大臣）樺山資英氏（現内閣書記官長）加藤前内閣の法相岡野敬次郎氏（現文部大臣）や山本伯の女婿財部海相等が参集していた。恰度大地震のあつた時には岡野氏が退出して、水交社裏のお池を俯瞰した二階の貴賓室では山本伯と平沼騏一郎氏が組閣に関する用談中で、松の木の植え込みを中央にした前庭には山本伯の十二号の自動車を始めとして各新聞通信社の自動車が五六十台もずらりと輪をなして並んで居た。山本伯の参内、新閣員の親任式は今夜か明朝かに迫つて居るので、記者団は水交社の内外に屯して、いざと云はば直ちに出動する準備を整へて居た。

と一日の真昼に帝都を揺がす大地震、すはと云ふ間に記者団は戸外に飛び出して危険を避けたが、屋根の瓦が遠くまで飛んで来る。玄関の柱がジリジリと音をたてて真つ二つに割け落ちるやら、裝飾に置いてあつた砲弾が打ち倒れて転げ出す。植込みの大松が危険な程大揺れに揺れる。柵が壊れて撥ねる飛ばされる。立

って居た人達が打ち倒れたと思ふと、大地を匍って居た者が団子のやうに転げて行く。〔中略〕

私共七八人の者は大危険を冒して半ば崩れかけた玄閣から中へ這入った。其処から奥を視ると、二階の貴賓室の屋根がストローヴの煙突と共に五坪ばかり崩落して居る。其の外にも三四個所陥落した処がある。「山本さんが居たのはあの部屋だ！」と皆の者は何者かを見出すやうに其の方向を睨んで居る。〔中略〕

山伯は裏庭に通れて平沼驥一郎氏、財部海相と共に庭に衝つ立って何か小声に談話していた。「恐ろしい地震でしたネ？」と私が尋ねると、伯は笑ひながら「本当に脅かされたネ、此処は此の位で済んだが、ひどい目に遭った人も多からう」と罹災者の身の上に同情して、幾度か破壊して無残な姿となった水交社の屋根を仰いで居た。「二階から飛び下りられたそうですネ？」と訊くと、平沼氏は傍ら「なに、そんなことありませんよ、私と一緒に梯子段を下りて来られた」と説明して「なかなかお元氣だったよ、ちょうど私とお話中で・・」と付け加えた。①

元老が挙国一致による山本内閣を要望したのは、第一党たる政友会の内紛とこれに次ぐ憲政会の政策に危惧を抱いたためとされる。ただし、西園寺の異常な決意から推断すれば、一九一三年からの第一次護憲運動で政党内閣の貫徹が強調され、その実現を警戒した深慮によるとも考えられる。衆議院の総選挙をも翌年に控え、山本自身が語るとおり、各党党首との入閣交渉は実際に難航した。

① 浪田紅塔編著『関東大震災実記』有朋堂、一九三三年。四一八頁。

一九一六年より寺内内閣で内相と外相を歴任し、東京市長の地位にもあつた後藤新平は、非凡な外交的手腕と壮大な行政計画で世論の人氣を博する。政変のたびにしばしば首相候補と噂されつつ、基盤党派の稀薄な彼について政界の一部には薩摩派の巨頭山本権兵衛との提携を望む意向も存した。加藤首相逝去の八月二四日講演のため旅行の途上にあつた後藤は、二七日に帰京して翌朝山本権兵衛の私邸を秘かに訪れる。すでに組閣の本命を受けた山本に、後藤は閣外からの協力をのみ約束した。以後桜田町の自邸で組閣の形勢を見守っていた彼は、破壊と火災がなお続く翌日、水交社での組閣中止と内内閣の継続も囁かれるなかで、いち早く山本のもとへ駆けつけた。① こうしていわば大地震の衝撃が、後藤新平と山本権兵衛の連携を緊密にし、震災・復興内閣の迅速な成立を可能ならしめる。

総理大臣山本権兵衛の筆談 その二

火につつまれた地震の一夜が明けると、どこからともなく流言蜚語が伝わって来た。思ふ人を呼びにやっても、なかなか来ないし、又情報すらない。実に気が、氣でならなかった処へ、来たのが後藤伯爵であつた。伯とは、既にそれとなく話してあつたのであつて、伯が来て、大体の様子も判つた。依て自分は、是では完全の組織を望む訳には参らぬ。しかし、内閣は一刻も曠くすべからず、二三の人とでも一緒に、骨と

① 鶴見祐輔著『後藤新平伝 国民指導者時代後期上(帝都復興篇)』太平洋出版社、一九四七年。

九二一九六頁。

為って働かうといふと、伯は勿論遣りますといふた。まだ二三の欠員もあったが、此の上時を緩うするわけには参らぬので、一時兼撰の案を以て進む事にして、午後三時を期して、永田町に乗り込むことにした。此時の自分の決心は、内閣のないのは、軍に根柢なきも同然である。戦なら、目的があるが、此天災に直面しては、目前に迫つてある急を済ふに全力を注がねばならぬ、日光に在ます両陛下の御安泰を知るのが第一であるは勿論であるが、早く赤坂離宮の御用を承はつて、充分に奉行しなければならぬ。夫れには、本拠が無くではならぬ、逡巡すれば、刻一刻と、不安は増す、さうなれば民心の帰趨予め知る可らず、或いは挽回す可らざるに至るなきやも保し難い。万一、維新以来光輝ある歴史を毀損するが如き事あらしめてはならないと痛感した。当時の気持はこんな風であった。此気持を以て、直に赤坂離宮に伺候しますと、御上の御座所は、誠に御悲惨な御有様に拝しまして、恐れ入り乍ら組閣の事を奏上しました。ここに於て例のない親任式を挙げらるるに至りましたが、如何にも恐懼に堪えませむでした。「中略」かくて内田前首相との間に引継を了し、緊急勅令の發布を仰がれたのは、相当の措置であつたと挨拶致し、時宜に適した事をされたから此儘御受取すると申して、直に新聞員に此時気持だけ話して、明朝早く参集会議すべき旨を告げて、其の夜は一応帰宅しました。①

こうして山本権兵衛は二日午後七時赤坂離宮へ伺候して摂政宮に拝謁し、組閣の完了を捧答する。まもなく午

① 『帝都復興秘録』三―八頁。

後七時半同離宮萩の茶屋において新内閣の閣僚八名の新内閣が挙行された。早急な親任式には新聞記者もほとんど気づかず、民衆は電柱等への貼紙や新聞の号外で三日の夕刻これを知るのである。①

大手町に所在する大蔵省印刷局も震災により庁舎が焼失した。そのため緊急の徴発令や新内閣の叙任を告げる官報号外は、永田町首相官邸において二日の午後以降手書きを謄写版で刷られる。官報解題によれば、それらは「市中猛火ノ火焰熾ナル中ニ夜ハ蠟燭ノ光下に辛ウシテ印刷」され、各大臣各省庁に配布された。

官報 号外 大正十二年九月二日 印刷局

朕ココニ緊急ノ必要アリト認メ帝国憲法第八条ニ依リ非常徴発令ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名御璽

摂政名

大正十二年九月二日

内閣総理大臣伯爵 内田康哉
外務大臣伯爵 内田康哉

鐵道大臣伯爵 大木達吉
陸軍大臣 山梨半造
司法大臣 岡野敬二郎
內務大臣 水野鍊太郎
農商務大臣 荒井賢太郎
大藏大臣 市來乙彦
文部大臣 鎌田崇吉
通信大臣子爵 前田利定
海軍大臣子爵 財部彪

官報 号外 大正十二年九月二日 印刷局

叙任及辞令

大正十二年九月二日

海軍大将正二位勲一等功一級伯爵 山本權兵衛

任内閣總理大臣

内閣總理大臣正二位勲一等功一級伯爵 山本權兵衛

兼任外務大臣

從二位勲一等子爵 後藤新平

任内務大臣

正五位勲三等 井上準之助

任大藏大臣

陸軍大将從三位勲一等功三級男爵 田中義一

任陸軍大臣

台湾總督正三位勲一等男爵 田健治郎

任農商務大臣兼司法大臣

正三位勲一等 犬養毅

任通信大臣兼文部大臣

正四位勲二等 山之内一次

任鐵道大臣

①

① 『官報 号外』大正十二年九月二日（緊急徵発令）。大藏省印刷局。online.
『官報 号外』大正十二年九月二日（叙任及辞令）。大藏省印刷局。online.

首相の人選について下問を受けた元老のうち、鎌倉の別邸で療養中の松方正義公爵については、死亡との誤報が九月四日付新聞に記載されたが、六日に至り無事脱出が確認された。「地震と知るや二階はじご段のわきに身をひそめたときに家屋崩壊したが、幸に大した怪我もなく一時間後に救い出され、扇ヶ谷川上別邸に避難し、岸博士が応急の手あてをした。同邸では同孫三郎氏と女中一名が惨死した。」① 他方西園寺公望の安否に關しては、一日まず駿河台の留守邸を確認し、ようやく七日の夜静岡の座魚荘で無事を祝した秘書松本の日誌が詳細である。なお、この時期における記述で興味深いひとつは、大地震の日彼が宇田川町の崩れかかる自宅から青山墓地へ避難しつつ、やがて近代政治史の基本資料となる自己の日誌をなによりも防衛したとの気概である。

元老西園寺公望の消息（松本剛吉政治日誌）

九月一日

午前中は浅岡に於いて各種の情報を聞き、正午十二時内田嘉吉氏と工業倶楽部に於て会見の約あり。將に家を出んとする際、前代未聞の強震に会す。為に其約に赴くことを得ず。浅岡方は転覆の難は免れ得たるも余震連続危険言うべからず。難を避けて家人と共に海軍省参考館横の広庭に在りしが、全市猛火におおわるるに及び、予は駿河台なる平田伯邸ならびに西園寺公留守邸、富坂三浦將軍邸の安否を氣遣い、木村欽一を自動車に乗せて見舞に遣はしたるも、三浦邸の外すでに火難に罹り、入ることを得ずして日暮れて引返し來

① 『東京日日新聞』大正十二年九月二日および九月六日。

たれり。此時銀座木挽町方面よりの飛火頻りにして、避難所に搬來せる荷物に燃移りたるを以て、山田友一郎、今井賢次等を具して水交社を抜けて宇田川町自宅に歸來す。時に午後六時を過ぎたり。家を窺けば土蔵崩壊目も当てられざる勢いとなれり。此芝区の半部及び京橋方面は火の海と化し、宇田川町もまたまさに類焼の運命を免れざる勢となれり。よつて他に難を避けんとし、家人に命じて貴重書類（主として此日誌）の外一物も携行すべからず、ただ生命を大切にして物品を顧みるなかれ、と勵ましつゝある時、浅岡家族八人來り投ずれば、一同相率ひて迂回して十番より青山墓地に出て、同所に一夜を明かせり。かくて宇田川町自宅は全部烏有に歸したるも、幸に政治日誌のみは安全に之を携行することを得たり。

九月五日

藤沢迄は自動車を用い、藤沢以西は沿道の家屋倒壊路面を塞ぎ、道路亦龜裂破壊甚しき為徒歩し、同夜は大磯町耶穌教会教会堂に仮泊することとし、予は二時間下駄箱の上に眠り、夜の白むを待ち午前十一時小田原に着、静岡聯隊司令官の談話を聞くに、西園寺公は御殿場にて家屋倒壊の為め藪のなかに避難し居らるるとの事ゆえ、翌七日午前五時小田原を發し箱根に入りしに、乙女峠は崩壊して通過不能の為め旧道を辿りて沼津へ出て、同駅長に会ひしに、西公は三日御殿場より興津に移られたる旨を聞き、直ちに興津に電話を以て御尋ねしたるに、待ち居るゆえ直に來り呉れるとの事なり。同夜八時の汽車にて沼津を發し、馳せて西公邸に到る。

公は大に喜ばれ、種々の談話をせらる。予はつぶさに東京其他東海道各地小田原等の実情を報じたる後、静岡県下に入るや小兒婦人等に至るまで罹災者の救助に力をつくし、互助同情の限りを致し居る所を見、且

つ米と梅千さえあれば何事にも耐え得る我国民性の頼むべきを見受けたりと申せしに、公は欣んで肯かれたり。①

なお、西園寺の安否確認についてはつぎのような秘話も伝えられる。「摂政宮殿下には御殿場地方の地震激甚なりし趣き聞き召され、西園寺公の安否を太く御懸念あらせられ西園寺の近情に付陸軍省へ問合せあり、同省にては直ちに所沢飛行機の小関飛行大尉をして園公の動静を聞かん為め飛行機にて御殿場に赴くべく命令した。よって同大尉は五日午前八時所沢を出発し同九時半三島に着し、午後二時半自動車にて沼津に赴き、同駅から汽車によりて興津に西園寺公邸を訪問し、別荘に殿下の御詔を伝達したが、西園寺公は幸無事である」と。②
かつて帝国憲法の起草にも関与した伊東巳代治は、ふたりの元老や有力な枢密顧問官が、あるいは首都を離れ、あるいは消息不明であるときに、地震直後の首相官邸へ参じ、暫定内閣の危機管理を援護した。また、山本内閣の成立に係わっては、躊躇する岡野敬次郎と平沼騏一郎を説得し、内閣を決意させる。この結果追加分として九月六日岡野は文部大臣に、平沼は司法大臣に任命された。かくして伊東は山本首相の有力な参与となり、震災政策にも参画するが、やがて復興事業の規模について後藤新平による構想へ厳しく対決するに至る。

① 『大正デモクラシー期の政治―松本剛吉政治日誌』二五六―二五七、二六一頁。

② 山口好恵著『地震と内閣』共友社、一九二四年。前編、七七頁。

枢密顧問官伊東巳代治の筆談

九月一日には、愈々、後れてみた刀剣類の手に、取り掛らうとして、先ず、家人に離れの掃除をさせた。午少し前に、掃除もほぼ済むたといふから書斎に入らうとすると、地震だというて、家人が、庭へ飛出して来た。自分は、地震の恐ろしい経験を、知らないから、平気であだが、忽ちにして石蔵が、崩壊して来て、咫尺も弁せず、といふ光景が、眼前に展開した。実に間髪を容れずと申すか、自分は偶然にも命拾ひをした。震動尚激しき中を、本屋の方に来て見ると、火が屋根につきかけて、子供達が、家人と共に、一生懸命に防火に、つとめてみたが、母が、赤坂の方にあるので、見舞に行かうとすると、内閣から使が来た。取るものも取敢えず、浴衣掛けで官邸へ駆けつけ様とすると、子供達は、あの官邸は、九十日間に建てた急造の建築で、こんな時には、危ない事をよく知るので、しきりに止めた。しかし、外の時ではないから、そのまま出掛けた。議事堂建築の前通りは、この時もはや逃げまどう人で、肩摩（かたこすり）較撃（せうげき）の有様であった。辛うじてそれを押分け押分け、官邸へ行くと、庭の植え込みにテールを囲むで、内田臨時首相を中心として、閣議をしてゐた。時は午後一時頃でもあったろうか、当時は申すまでもなく、内田君以下閣僚皆辞表を閣下に捧呈して待命中であった。「中略」内田内閣が当時一番に心配したのは、罹災救助の事を善くする為め、非常微発令を發布しようとするに在ったと思ふ。然るに之は緊急救助の御裁可を仰がねばならない。夫には枢密顧問の議を経るを要件とする。しかし此時には清浦議長の邸は大森に在るが、在否の程も判らず、又之を迎へて来る方法もない。他の顧問官また同様で結局偶々自分が一番近くに居るので、呼ばれたと思ふ。「中略」
此時自分の最も心配したのは、差向き米の用意があるか、無いかであった。米廩（べいりん）は如何と尋ねたが、早や

江東の米倉は焼けている、陸軍の糧庫も危ないといふ話であった。依って自分は、早速玄米を入れる献策をした。すると船をどう回さうかといふ様な話をしているから、自分はそんな手緩い事では急場は間に合わない。かういふ時こそ軍艦を使ふがよいと發議した。之は岡野君（当時法相）などから、夫れは奇抜の考だといはれた事を覚えていた。

こんな事をしていゝ中にかれこれ三時間も経つたであろうか、漸くにして塩むすびの炊出しに有りついて、昼めしを食べていると、段々断片的ではあつたが、報告が集まつて来て、大火災が諸方に起こつた、警視庁さへ火を出したといふ事まで判つて来た。これでは早く戒嚴令を施行するの外あるまいと申したが、此時には恰も既に隣りの支那公使館に火がついてゐた時で、閣議の席からは十六七間しか離れてゐまいと思つたが、不思議に熱く感じなかつた。さては風が變つたのであろう、これなら自分の邸も助つたであらうと思つたし、内閣の御用もまず済むたので、自分は官舎を辞し、赤坂へと道を急ぐと、支那公使館の大層高樓が、消防も無ければ、人だかりもなく、静肅の火事をしてゐる光景が、いふに言われなかつたので、自分は思はず佇立して、独りで火事を眺めながら、物のひととき思案した。

そしてこれは大變だと思つたから、引還へして自分の邸へ戻ると、無論消防の影だに見えない。唯家族共のみが一生命に防火に力めてゐるよいふ有様であつた。危険区域を漸く脱したかと思つてをると、六時半頃からは又番町から出た火に襲われるといふ風で、もう到底駄目だと思つた。しかしながらもうどうする事も出来ないから此所を死守して踏止まらうとしてゐると、宮内省から、避難して来てはと、申さるる儘に、当夜は宮内省のお庭で夜を明かした。（中略）

二日未明一寸邸に帰ると、彼是する中に水野君が徵發令に対して判を押して貰ひに来たので、戒嚴令の方はどうしたかと聴くと、余り業々しいといふ論もあつてといふから、自分は皆が必要と認める時には、事既に遅しであると申して、即刻戒嚴施行のご裁可を仰がねばなるまいと注意した。すると三時頃かと思ふが、馬場法制局長官が今出したといふ報告をしに来たので、自分は始めてまずそれでよいと安心した。是れは内田内閣最終期の事実であつたが、当時内閣としては踏み止まつて、違ふだけの事はヤツたに違ひない。此功績だけは、どうしても認めてやらねばならぬ。

水野君と前後して犬養君が山本伯の使だといふてやつて来た。そしていふには、今此大事の場合に岡野、平沼両君が入閣の事を考慮中になつてゐるので、組閣の事が進まぬ。是非自分からも説得して貰ひたいといふことであつた。それは怪しからぬと思つたので、自分は直ぐに火事場を通り抜けて、馬場を訪ひ、共に岡野君の居る所を尋ね、邸宅は同君が前日の閣議で種々災後に善処するの応急策を講じてゐる間に丸焼になつた仕舞つた、岡野君に凡そ物事を考えるのは時機がある、今は躊躇する場合でないと言ひ伏せ、又大審院に平沼君を訪ひ、自分は此時始めて大審院といふ役所の門を潜つた、余震を感じながら同様説き勧めたものである。かかる間に成立したのは山本内閣であつた。①

地震発生時の政權に関与したこれら山本、水野、伊東の証言は、一九三〇年（昭和五年）に刊行された『帝都復興秘録』に集録される。これを編纂した東京市政調査会は、関東大震災の震災と復興をめぐる座談会を、同年

四夜にわたり企画した。ここには井上準之助、阪口芳郎、水野鍊太郎など当時関係者五十名が列席し、山本権兵衛と伊東巳代治も編者を介して筆談を寄せた。① とはいえ、震災復興の内閣にあつてもっとも重要な役割を担った後藤新平は、前年四月に列車車中で脳溢血により倒れ、京都の病院へ運ばれたのち逝去した。彼の委細な震災証言は手稿『三百万市民ニ告ク 山本内閣入閣の事由と復興計画ニ対スル所信』でのみ遺され、二五年後娘婿たる鶴見祐輔の名著『後藤新平伝』に採録される。

後藤新平「山本内閣入閣の事由と復興計画」その一

世人ガ記憶スル如ク、山本伯爵ハ去ル二十八日ヲモツテ内閣組織ノ大命ヲ拝セシガ、同日予ハコノ事ニ関シテ、伯ト水交社ニ於テ第一次会見ノ機ヲ得タリ。タグシ当日ノ会談ハ何ラ予ノ入閣ノ交渉ニ触レタタル非ズ、否、予ガムシロ閣外ニ在リテ微力ノ許ス限リ山本内閣援助ノ底意ヲ有セシコト既記ノ如シ。コレヨリ先、予ガ帝国外交ノ新領域ヲ開キ、一面ニハ東洋平和ノ基礎ヲ強固ニシ、他面國運發展ノ趨勢ニ適応センコトヲ欲シテ、日露修交ノ促進ニ潜慮セルノ事案ハココニ改メテ説クコトヲ要セズ。ケレドモ機運ナオ熟セズシテ、イマゲ彼我兩國間ノ正式交渉ヲ進メルニ至ラザリシガ、当時閑地ニ悠遊セル山本伯爵ノ達眼ハソノ身内ニアリテ自ラ國政運用ノ衝ニタテル責任者ヨリモ遙カニ深達ナル理解ヲ有セラルルヲ知り、予秘カニソノ明識ニ推服スル所アリ。故ニ予ハ自己ノ入閣ニヨツテ對露問題ノ行懸リヲ山本内閣ニ持チ越シ、伯ノ自由手腕ニ累

① 『帝都復興秘録』一―四頁。

ヲ及ボスコトヲ避ケ、大勢ノ帰趨ヲ導キ、伯ガ容易ニ自由解決シ得ベキ氣運ヲ造ラント欲シタルト同時ニ、予ハ閣外一臂ノ勞ヲ捧ゲ、伯ノ成功ヲ期待スベク切念セリ。(中略)

然カルニ九月一日ノ大震災ハ突如トシテ帝都ヲ震撼シ、組閣中ナル山本伯爵ノ責任ハ不慮ノ天災ニ遭逢シテ、俄然絶大性ヲ帯ビ来レリ。今ハ尋常ノ場合ニハアラス、一刻モ速カニ新内閣ヲ組織シ、上ハ聖明ヲ対揚シテ、下ハ万民ヲ安ンゼザルベカラザル重大危機ナリ。コノ期ニ及ンデ区々ノ事情何カアラン。所謂成敗利鈍ノ如キ逆賭スベキ処ニアラザルノ秋ナリ。又政見政策ノ論議会商ニ日ヲ消シ、徒ラニ政局ノ動揺ヲ傍觀スルガ如キハ臣子ノ分ニアラス。ヨツテ予ハ九月二日山本伯爵トノ会見ニヨリ、即時入閣ノ意ヲ決シ、自ラノ微力ヲ顧ミルノイトマナク内務大臣ノ重責ヲ織スコトニナレリ。①

① 後藤新平「三百万市民に告ク 山本内閣入閣の事由と復興計画ニ対スル所信」鶴見祐輔著『後藤新平伝 国民指導者時代後期上(帝都復興篇)』太平洋出版社、一九四七年。一〇四―一〇五、一〇八一―一〇九頁。